

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

The Imperial Japanese Troupe in Vienna in 1870

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-08-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 若宮, 由美 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1103

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



1870年ウィーンにおける帝国日本人一座

The Imperial Japanese Troupe in Vienna in 1870

若宮由美

WAKAMIYA, Yumi

1. はじめに

帝国日本人一座は、正しくはOriginal Imperial Japanese Troupeといい、日本語名は筆者がそれを日本語として訳したものである。この劇団は、1866年11月23日（慶応2年10月17日）付の江戸幕府より「御印章」（当時のパスポート）第1号を授けられた日本の見世物劇団である。1867年のパリ万国博覧会を目指して日本を後にした。鎖国が解かれてパスポートが発給された経緯や、この時にパスポートを得た帝国日本一座がどのようなメンバーだったかという話は、後に譲る。11月25日（以下、西暦）に南町奉行所でパスポートを得た帝国日本人一座のメンバー18名は、その日のうちに神奈川に向かっているが、彼らの行動については後見人である高野廣八（1822-90）が記した『廣八日記』¹⁾に行程が記されている。『廣八日記』には、役人や留学生にはない視点が盛り込まれているばかりでなく、民間人が異国に触れた経験に溢れている。これによって、安岡章太郎の『大世紀末サーカス』（1984）、三原文の『日本人登場』（2008）、フリーデリク・ショットの*Professor Risley and the Imperial Japanese Troupe*

（2012）など、多くの著作が記された²⁾。高野廣八は2年という契約で一座の後見人を引き受け、アメリカ経由で一座とともにヨーロッパに行き、フランスのパリまで赴いて、再びアメリカ経由で日本に帰国している。幕府が倒され、新しい時代を迎えた1869年4月16日、つまりは明治2年3月5日のことである。しかし、この時に一座の全員が帰国した訳ではなく、9名がさらなる契約のもとに海外に残ったわけである。本稿においては、最初の活動期を第1期と呼び、2年の活動を経て当初のメンバーの一部が帰国した後の活動を第2期と称する。第1期の帝国日本人一座の活動は高野廣八によって伝えられて部分が多く、2年後の解散後はどのような名称で、どのような土地で活動したかはわずかしかわかっていない。その端緒を筆者は1870年のウィーンに見つけたのである。この点を明らかにしていきたい。

2. リズリーと帝国日本人一座

まずは、帝国日本人一座という劇団がどういうものかをみてみよう。そもそも、日本で帝国日本人一座という芸人集団が公演していたかと問われれば、否と返事を返す必要があ

キーワード：濱碓定吉、ノイエ・ヴェルト、ヨーゼフシュタット劇場、シュトラウス楽団
Key words : Sadakichi Hamaikari, Neue Welt, Theater in der Josefstadt, Strauss Capelle

ろう。まず、日本で興行するには「帝国日本人一座」という名称は仰々しいばかりで、肝心の座主の名前がわからない。これでは日本人相手の商売にはならないのである。海外へ出て、初めて「帝国日本人」の意も印象深くなる。また、これまで230年余りに渡って日本以外の地を訪れることのなかった日本人にとって、日本人の芸人が自ら組織しえただろうか。これも答えは否である。リチャード・R.リズリー・カーライル Richard R. Risley Carlisle (1814-74) というアメリカ人が帝国日本人一座を組織し、この一座とともに日本を出立したのである。彼は単なる興行師というだけではない。自分でサーカスをみせながら、各地をまわり、日本では彼自身が1864年（元治元年）に横浜居住区で最初の劇場を建てた人物で、西洋サーカスを日本にもたらしただのであった。上海から「1864年3月6日、リズリー先生は10人の芸人、8頭の馬と共に横浜港へ到着した」（三原 2008:6）。リズリー

を「先生 Professor」と評するのは、大学を出た資格を有するというのではなく、愛称のようなものであっただろう。

1864年の横浜居留地は、外国人が増えたといはいえ、500席ほどのテント小屋を永続保持することは不可能なことであった。3月28日の初日には、居留地に住む外国人250名ならびに神奈川奉行を代表とする日本人200名が訪れた³⁾が、この西洋サーカス、すなわち「中天竺舶来軽業」は大失敗に終わった。横浜居留地の規模は小さく、居留地外に暮らす日本人を大々的に集める容量には欠けていた。外国人が居留地外に繰り出すことは、法律的に不可能だった訳である。一座はわずか1カ月に解散に追い込まれる。アメリカ、ヨーロッパばかりなく、ニュージーランド、オーストラリア、インド、シンガポール、バタヴィア、香港、タイ、マレーシア、上海と渡り歩いたリズリー先生は、これでアメリカに帰ると思いきや、1864年5月に自身のサーカスが解散

表 1：帝国日本人一座のメンバー（1866）⁴⁾

旅券番号	名前	芸名	年齢	役回り
一	浪五郎	隅田川浪五郎	37	からくり 手品
二	とわ	隅田川小まん	35	同上 独楽廻し
三	とわ吉	隅田川松五郎	17	綱渡り 軽業
四	とう	隅田川とう*	20	三味線弾き
五	梅吉	隅田川梅吉*	36	衣装方
六	菊次郎	松井菊次郎	30	独楽廻し
七	つね	松井つね*	8	右子役
八	松五郎	松井新次郎*	37	小道具役 次席加勢
九	梅吉	濱碇米吉	12	角兵衛獅子
十	藤吉	濱碇千太郎 藤吉 藤松	10	角兵衛獅子
十一	定吉	濱碇定吉	35	足芸 太夫人 曲持
十二	長吉	濱碇長吉	11	上乘
十三	梅吉	濱碇梅吉	12	上乘
十四	岩吉（高野廣八）	濱碇岩城*	47	後見
十五	傳吉	濱碇傳吉	19	足芸 若太夫
十六	兼吉	濱碇兼吉*	27	口上 主席加勢人
十七	林蔵	濱碇林蔵*	30	角兵衛獅子 親方 笛吹
十八	繁松	濱碇繁松*	38	太鼓 舞台装置方

(作成：若宮)

した後も横浜に残って、「牛乳店をひらき、氷倉庫を建て、商人」（宮永 1999：5）となった。それから2年後の1866年5月23日（慶応2年4月9日）、「徳川幕府は『海外渡航差許布告』を出して日本国民の海外渡航をついに正式許可するに至った」（三原 2008：8）。鎖国状態が打ち破られ、ついに日本人が海外に行くことができるようになったのだ。あいにくと、リズリー先生はこの時に「天津に氷の買付けに出かけていて横浜の家には不在であった」（三原 2008：8）が、6月21日に帰ってきた頃にはすっかり日本人の芸人とともに海外にでる心持ちになっていたであろう。

1866年、「御印章」の発給に向けた業務は他の文献に詳しいので、そちらを参照してもらうが、日本の外国奉行ばかりでなく、申請人との実際のやり取りを行った江戸町奉行所や神奈川奉行所、また各国の公使館がこの件では労をとった。その結果、リズリー先生の「帝国日本人一座」の18名が、江戸の外国奉行所で発行された「御印章」の旅券番号一番から十八番を得たのである。18名のリストを表1に示す。これを見ると、手品の隅田川浪五郎一家5人（年俸金千百両）、松井菊次郎一家3人（年俸七百両）、足芸・曲持の濱碇定吉一家10人（年俸金三千五百両）の三家が加わっていたことがわかる⁵⁾。リズリー先生の広い経験から分野の違う団体が集められた。高野廣八は濱碇一家に所属していたことがわかる。また、松井菊次郎は1868年4月8日にロンドンで病死した（宮永 1999：139-148）。

帝国日本人一座はリズリー先生と二人三脚で日本を発った訳ではなかった。それというのも、帝国日本人一座は出発当初に英語が話せる者が誰一人おらず、リズリー先生は日本語がまるで出来なかったからである。そこで、

バンクス Edward Banksという横浜の米国領事館に勤めていた男で、高野廣八が「ベンクツ」と呼ぶ人物と一緒に海を渡った⁶⁾。当時の横浜米国領事館には3名の職員しかいなかったが、彼はそのうちのひとりである。だが、1869年1月に一座がパリ万博を含めた「欧州巡業を終えてニューヨークに戻って来た時、一座の稼ぎを持ち逃げし行方をくらました」（三原 2008：11）ことから、よからぬ人物という印象しかない。ニューヨークで仕事をし、本来の第1期の仕事は終わりとなる。帰国組の中に高野廣八も含まれていたのだが、『廣八日記』は何にもまして充実した記録であったことがわかるのである。

3. 江戸時代に海外へ渡った日本人芸人一座

帝国日本人一座が旅券番号第1号～第18号を獲得でき、その日の内にサンフランシスコ出港に動いた⁷⁾といえども、旅券番号の第19号～第27号は同じ日に松井源水一座⁸⁾に受領された。さらに一座は、神奈川の旅券番号第2号～第6号を取得した鳥潟小三吉一行⁹⁾とともに、イギリス船ニポール号に乗り西廻りでヨーロッパを目指した。出港に手間取った帝国日本人一座に対し、ニポール号の方が出港では先んじた。ともあれ、松井源水一座が1868年7月頃、帝国日本人一座が10日ほど遅れてパリに到着し、万国博使節の徳川昭武¹⁰⁾が7月20日にフランス帝国劇場 Théâtre du Prince Impérialに松井源水一座¹¹⁾、7月30日にはナポレオン円形劇場 Cirque Napoleonに帝国日本人一座を観劇している¹²⁾。パリ万博には、江戸幕府のほか、佐賀藩、薩摩藩が出品者に名を連ねていた。パリ万博に関する資料はわりと広範に残っている。

ここで時を、ヨーロッパからそれ以前のアメリカに戻そう。帝国日本人一座がサンフランシスコで公演をスタートしたのは、1867年1月7日のアカデミー・オブ・ミュージック Academy of Musicである（三原 2008：38）。しかし、慶応2年12月6日（1867年1月11日）付の『廣八日記』には、「同大入、鉄わり福松座中引きつれ見物ニきたり候なり」¹³⁾とある。つまり、帝国日本人一座が御印章を得て出国する以前の、「1866年10月29日に横浜港から出航し、同じ年の11月30日にサンフランシスコに到着していた」（三原 2008：39）のである。非合法の活動は現在の記録にはまったく登場しないものだ。非合法については、今後さらなる研究が必要なものである。

このように、1866～67年の時期には、わかっているだけで、ミカド、グレート・ドラゴン、フジヤマ、早竹虎吉といった軽業一座がアメリカに渡っている。西廻りには上述の松井源水、鳥潟小三吉らのグループ、そして長崎からはサツマ一座が出かけたともきく。しかし、彼らの一座には高野廣八のような筆まめはいなかったということだ。記録には残されていない。

4. 居残組の既存調査

リズリーは、一座と日本出国前に2年契約を交わし、「[1868年] 11月29日、ポルトガルのオポルトでの興行を終えたところで契約解消となった」（三原2008：27）。その後、帰国組と居残組に分かれるのだが、後見人を務めた高野廣八の帰国とともに記録係を失い、居残組の活動はわずかしかわからない。アメリカで公演を続け、1869年6月23日にはイギリスに戻り、リヴァプールにいたことがわかる¹⁴⁾。この時、リヴァプール・マーキュリー *Liverpool*

*Mercury*紙の記者は、演者は12名で13演目が行われたことを記している¹⁵⁾。また8月中頃には、ロンドンでブヒクロサン Tannaker Buhicrosan（オランダと日本の先祖を持つ）が率いる、別の日本人一座「ロイヤル・タイクン Royal Tycoon」としのぎを削っていた¹⁶⁾。「帝国／ロイヤル」の名前を使う正当性を競っていたようである。イギリスでの公演は、1869年12月27日～1870年1月1日にプリストルのオールド・シアター・ロイヤル Old Theatre Royalで6日間だけ行われた「さよなら公演」¹⁷⁾が、今のところわかる最後のものである。プリストル公演は、犬や猿の動物一座と舞台を共有していたばかりでなく、リズリー先生はこの一座と一緒にではなかった可能性が高い。

1870年3月6日付のエラ *Era*紙で、「リズリーなしでロシアのサンクトペテルブルクに向かった」¹⁸⁾とある。ロシアのサンクトペテルブルクの名を出すことは、出発の常套手段かもしれないが、リズリー先生なしで帝国日本人一座が動いていた証拠であろう。



図1：フレムデン・ブラット紙
1870年6月5日の広告¹⁹⁾

5. 1870年6月ウィーンのノイエ・ヴェルト

筆者はオーストリアの首都ウィーンに帝国日本人一座の足跡をみつけた。それは、当時の新聞である。彼らの行動は、まずはフレムデン・ブラット *Fremden-Blatt*紙、ノイエ・フレムデン・ブラット *Neue Fremdem-Blatt*紙、そしてツヴィッシェン・アクト *Die Zwischen-Akt*紙にみいだせる。最初は、図1のように、1860年6月5日付フレムデン・ブラット紙におけるノイエ・ヴェルトの広告である (*Fremden-Blatt*, 5 Juni 1870 : 8)。

ヒーティングのノイエ・ヴェルト／ヴァリエテス・テアター／(中略)／あさって火曜日、最初の客演／帝国日本人一座／リズリー先生の(20名の演者により)／彼らのリーダー／ハマイキリによる

帝国日本人一座のドイツ名はOriginal kaiserlichen Japanesenであり、最後のJapanesenだけが特に大きく書かれている。次に大きく書かれているのは、ハマイキリの文字であり、ウィーンにいる間はすべての新聞広告が「濱碇(ハマイカリ)」ではなく、「Hamaikiri(ハマイキリ)」を使っている。名前の上では、濱碇の方がリズリーよりも大きい。

では次に、ノイエ・ヴェルトについて見ていこう。ノイエ・ヴェルトは、1861～82年までウィーンのヒーティング地区にあった総合遊戯場である。コーヒー店の店主カール・シュヴェンダー父 Karl Schlender Vater (1808-66)が造ったものであり、1000名を収容するアリーナ、複数のダンスホール、夏の劇場、レストラン、コーヒーハウス、音楽パビリオン

などが広大な敷地の中に点在し、1日に10,000人が訪れる場所である。劇場も複数保持している。また、この音楽パビリオンは、ヨハン・シュトラウス2世 Johann Strauss Sohn (1825-99)をはじめ、彼の兄弟が毎週日曜にシュトラウス楽団 Strauss Kapelleを指揮し、その他には当時を代表する音楽家が日々演奏していたところである。劇場といえども、劇だけに興味が限定されことはなかったし、帝国日本人一座が与えられた劇場を独占できた。

話を帝国日本人一座に戻そう。帝国日本人一座の公演は6月7日が初日であったものが、雨のために延期となった。それは8日も同様で、9日の広告にはノイエ・ヴェルトの「ヴァリエテス・テアター Varietes Theater」と場所の掲載があるものの、「雨の場合にはザールテアター Saaltheaterで上演を行う」(*Fremden-Blatt*, 9 Juni 1870 : 8)と初めて但書をつけている。そこで、ついに初日が開けた。6月10日付のフレムデン・ブラット紙に、9日の事柄として「ヒーティングのノイエ・ヴェルトにて、日本人の公演が一昨日ようやく実現し、期待以上の成果をあげた。出し物の多くが驚嘆すべきものである。命綱なしできびきびと演技がなされる度に嵐のような拍手喝采が起こった。一見の価値があるものとして胸を張って紹介できる」(*Fremden-Blatt*, 10 Juni 1870 : 3)と報じられている。

ただし、6月10日の広告をみると、いずれにしてもどの新聞でも「最後から2番目と最終の客演」と書かれている (*Fremden-Blatt*, 10 Juni 1870 : 14, *Neue Fremden-Blatt*, 10 Juni 1870 : 13)。戦略であったかもしれないが、いずれの場合も5日間(うち2日は中止)の短い予定であったことがわかる。しかも、

ツヴィッシェン・アクト紙には「天候の悪い時には、ザールテアターで」(*Der Zwischen-Akt*, 10 Juni 1870)とわざわざ断り書きを入れている。場所としては、野外を想定していた。しかし、最初の最終公演はすぐに崩されたのである。6月11日の広告では、「最終公演」の文字は消え、さらなる広告が出されている。しかも、公演場所はザールテアターに変更されていた(*Neue Fremden-Blatt*, 11 Juni 1870: 14)。

ここでもうひとつ、帝国日本人一座がウィーンで知られていなかった例をあげる。ツヴィッシェン・アクト紙の表記の問題である。同紙は基本的に劇場新聞であるので、ノ

イエ・ヴェルトの日本人一座のことを報じるには珍しいといえる。しかも、6月7日に初めて掲載した時には、濱碓の苗字がHamaikiviと、その後の2日間は広告がなく、10日に広告がでた時にはHamaikieと綴られ、11日には再びHamaikiviとなり、12日からHamaikiriとなる²⁰⁾。これ以後は、この表記は崩れることはない。濱碓の苗字を伝えるのさえ、何日もかかっていた。ちなみに、ウィーンでの濱碓の表記は、ずっとHamaikiriであった。

1870年6月12日には、フレムデン・ブラット紙の広告は、図2のように横にJapanesenの文字をデザインしたものになり、帝国日本



図2：フレムデン・ブラット紙1870年6月12日の広告²¹⁾

人一座の扱いはひとつ上のステージに上がった。両横に名前を印刷するやり方は後の広告にもみられ、人目を惹く仕掛けである。

新聞広告を見てくると、最初の1週間は帝国日本人一座の力量を図っていた時期とみてよい。最初は、天候が悪化した場合の代わりに舞台も用意されず、休演が続いたこともそのひとつであろう。一度、当たりを出すと、後は扱いがよくなった。もうひとつの論点は、リズリー先生の件である。リズリー先生の名前は、広告にあったり、なかったりであるので、当の本人はいなかったと推論できる。リズリー先生がいるのに、名前を出さない筈はないからである。むしろ、リズリー先生の名前で客を呼んだと見ることが出来よう。

6. ノイエ・ヴェルトでの交流

ノイエ・ヴェルトは総合娯楽施設として様々な娯楽を提供していた。帝国日本一座が出演した初めての日曜日、すなわち6月12日には「夏祭」が開催され、**図2**からもわかるように、夜景を輝かせる照明とともに、ヨーゼフ&エドゥアルト・シュトラウスの楽団 Die Kapelle von Josef und Eduard Strauss (指揮：エドゥアルト・シュトラウス) とハノーファー王の楽隊 Die k.k. Reg.=Kapelle König von Hannover (ハノーファー王ゲオルク5世が所有するオーストリア陸軍第42歩兵連隊、楽長：ヴィーデマン Josef Wiedemann)²²⁾ が音楽を奏した。「劇場では3つの公演」とあり、その下に「オリジナルの帝国日本人一座の客演／リズリー先生による20人からなる演者とそのリーダーであるハマイカリ（原綴に従えば、ハマイキリ）の指揮のもと」と書いている。さらに下に、3つの舞台公演の演目が、左・中・右に区切って示されている。左枠は、スッ

ペ Franz von Suppé のオペレッタ《美しきガラテア Die schöne Galathé》が「6時半から背後のバルクテアター」で始まることが記されている。真ん中の「帝国日本人一座」は、「9時から上演が始まり、天候の非常によい日の場合、バルクテアターで」行われる。右枠は、ヴァイス Franz Weiss によるバレエ《アスモデア Asmodea》の公演が書かれ、「10時から大劇場で、初めての公演が行われる」とある。その下の3枠をまたがるところに、「各公演には20クロイツァー」の別途入場料が必要なことが注記されている。ちなみに、ノイエ・ヴェルトに入る入場料は、前売で60クロイツァー、3人グループで1人50クロイツァー、当日で80クロイツァーであった。

さらに**図2**をみていこう。20クロイツァーの追加料金を知らせる記事の下に、「リズリー先生のオリジナルな帝国日本人一座の観客が引きをきらないし、彼らの演目に対する称賛が止まないの、さらなる6公演、すなわち明日月曜、火曜、水曜、木曜、金曜、土曜の公演を決めた」とある。そして、さらに下にいくと、「もし天候が悪い場合には、シュトラウス・コンサートを大ホール、帝国日本人一座の公演」を室内に用意する。以上のように、ひとつの広告にこれだけの事柄が含まれているのである。ここに帝国日本人一座とシュトラウス楽団の明らかな接点がみいだされる。シュトラウス楽団と同じ会場内で、日本人が三味線伴奏付の曲芸を披露していた訳である。

7. ノイエ・ヴェルトでの契約更新

話を帝国日本人一座に戻そう。帝国日本人一座の6月13日から18日の6日間が第2陣の契約である。6月17日は「最後から2番目の公演」(*Fremden-Blatt*, 17 Juni 1870: 8; *Neue*

Fremden-Blatt, 17 Juni 1870 : 8) と宣伝されているが、18日になると最終公演の書き込みはなく、次の日の上演を知らせる広告に代わっている (*Fremden-Blatt*, 18 Juni 1870 : 12 ; *Neue Fremden-Blatt*, 18 Juni 1870 : 14)。さらに、19日には8日の契約延長があった。19日の新聞記事に、「帝国日本人一座は驚嘆する出し物で多くの来場者を集め、シュヴェンダー氏はさらなる客演を決定した。魅力的な演技により次の日曜まで」とある (*Neue Fremden-Blatt*, 19 Juni 1870 : 3)。ここに登場する遊技場の主シュヴェンダー Karl Schwender Sohn (1839-77) は、創始者の息子である。

この間に、一座の人気者であるリトル・オール・ライトの popularity がでて、21日から毎日一座の名前に「リズリー先生の帝国日本人一座。リーダーであるハマイキリのもと、『世界の不思議』であるリトル・オール・ライトがこの祝祭に卓越した演技をする」 (*Neue Fremden-Blatt*, 22 Juni 1870 : 14) という文言が加えられた。このリトル・オール・ライトは、アメリカで見世物を始めた頃、つまりは1867年初頭に第1期の興行を始めた頃に、曲持の最高潮で技を決める時に言った「オール・ライト」という言葉が呼び名にもなった²³⁾。「オール・ライト」は当時、濱碇定吉の息子である梅吉の呼び名であった²⁴⁾が、日本を出発して4年経って誰が演じていたかはわからない。ただし、現場の状況は誰が演じたかは不明でも、「リトル・オール・ライト」の力量を評価してきたものと理解できる。20日からの週は、ノイエ・ヴェルトのテーマを「日本の祭り *Japanesisches Fest*」とする日が目につく。そして、6月24日には「帝国日本人一座のリトル・オール・ライトこと『世界の不思議』

の慈善公演 *Benefiz=Vorstellung des Wunders der Welt des Little All Right der Original-Japanesen*」が開かれるのである (*Neue Fremden-Blatt*, 24 Juni 1870 : 16)。また、同じ新聞記事には「いくつかの新しい出し物を用意する」と書いてある (*Neue Fremden-Blatt*, 24 Juni 1870 : 3)。

さらに、6月27日から3回目の契約延長となり、7日間の公演が付加され、そのうちの7月1日～3日は「さよなら公演 *Abschiedsvorstellungen*」が行われた。「さよなら公演」が3日間行われたことも、一座の人気をあらわしている。そして、7月3日に公演が終わる。6月28日の新聞記事に、「帝国日本人一座はヒーティングのノイエ・ヴェルトでの客演を次の日曜に終える。その後には、モスクワとペテルブルクで長い客演をすることになる」 (*Neue Fremden-Blatt*, 28 Juni 1870 : 4) とある。ここでもロシア公演を予測させ、7月4日に忽然と帝国日本人一座はウィーンを後にする。7月に予定していた公演があったようだが、その行き先はわからない。また、ノイエ・ヴェルトでの新聞広告には、演技の人数はあっても個々の演者の名前、芸などはわからない。第1期で日本に帰国したのは、後見人の高野廣八をはじめ、音楽方や裏方であった。それらの人をどうやって補充したのか、ということも不明のままである。

8. ノイエ・ヴェルトでの新生シュトラウス楽団

一方で、西洋音楽の方へ目を向ける。帝国日本人一座がウィーンに着いた1870年6月、シュトラウス家ではヨーゼフ・シュトラウス Josef Strauss (1827-70) が不在だった。彼は4月17日（復活祭の日曜）にウィーン楽友協

1870年ウィーンにおける帝国日本人一座

- 1) オッフェンバックのオペレッタ《トレビゾンヌの王女》によるポプリ Potpourri aus der Operette “Die Prinzessin von Trebizonde” von Offenbach²⁶⁾
- 2) マイアベーアのオペラ《ユグノー教徒》のイントロダクションと合唱 Introduction und Chor aus der Oper “Die Hugenotten” von Meyerbeer
- 3) ヴァーグナーのオペラ《さまよえるオランダ人》の操舵手の歌と水夫の踊り Steuermannslied und Matrosentanz aus der Oper “Der fliegende Holländer” von R. Wagner
- 4) ヨハン・シュトラウス2世：ポルカ・フランセーズ〈クラップフェンの森で Im Krapfenwaldl〉 op.336
- 5) ヨハン・シュトラウス2世：〈エジプト行進曲 Egyptischer Marsche〉 op.335
- 6) ヨーゼフ・シュトラウス：ワルツ〈ウィーンの子供 Wiener Kinder〉 op.61
- 7) ヨーゼフ・シュトラウス：ポルカ・フランセーズ〈上機嫌 Heiterer Muth〉 op.281
- 8) ヨーゼフ・シュトラウス：ポルカ・シュネル〈騎手 Jokey-Polka〉 op.278
- 9) エドゥアルト・シュトラウス：ポルカ・フランセーズ〈愛を込めて Con amore〉 op.60

表2：1870年7月31日のシュトラウス楽団によるプログラム²⁵⁾

会に出演した後、同月25日にワルシャワに旅立った。5月15日にシーズンが開幕するが、6月1日には演奏会中に意識を失って舞台から落ち、ウィーンに運ばれたが、7月22日に死去した。契約が残っていたため、兄ヨハン2世はポーランドに向かい、仕事をこなした。そうした苦境にあって、エドゥアルト・シュトラウスEduard Strauss (1835-1916)はシュトラウス楽団を率いてウィーンでの演奏を続けたのである。

7月22日にはヨーゼフ・シュトラウスが亡くなり、24日はシュトラウス楽団がノイエ・ヴェルトを休演し、7月31日に新生シュトラウス楽団、つまりはヨーゼフの名の取れた、エドゥアルトだけのシュトラウス楽団として登場する。その日の演奏は表2の通りである(*Fremden-Blatt*, 31 Juni 1870: 12に基づく)。

第1曲、第4曲、第9曲が新曲である。いつもと比べれば、エドゥアルトの曲が少ない印象だが、亡くなったばかりのヨーゼフの曲を集めているだけに、これは当然の結果であろう。ヨハン2世の曲を2曲(そのうち1曲は新曲、もうひとつは5月の開幕でも演奏している曲)は、シュトラウス楽団の特徴をひき継いでいる。残りは、オペラとオペレッタの編曲引用という形であり、これらの引用も

のも、すべて管弦楽化して演奏された。新生シュトラウス楽団のスタートと、帝国日本人一座の和風音楽が、ノイエ・ヴェルトの客を楽しませた。

9. 帝国日本人一座の再来

8月7日に帝国日本人一座はノイエ・ヴェルトに舞い戻り、15日まで公演を続ける。一座の名称は「リーダーであるハマキリと世界の不思議、リトル・オール・ライトの帝国日本人一座。英国公子公女の保護のもと、ロンドンへ帰る途中の再演」とある²⁷⁾。そして、再演は9日間であった。8月14日には、ノイエ・ヴェルトの特別な行事として、〈日本行進曲 Japanesischer Marsch〉²⁸⁾がノイエ・ヴェルト・カペッレ Neue Welt-Kapelleにより、コタリ Anton Cotallyの指揮で演奏されている。作曲者はヨーゼフシュタット劇場のカペルマイスターであるロート Franz Roth (1837-1907)であった。それには8月16日から9月1日までヨーゼフシュタット劇場で帝国日本人一座が興行を行っていることと関連がある。ヨーゼフシュタット劇場のカペルマイスターが帝国日本人一座に捧げるように〈日本行進曲〉に結実している。ヨーゼフシュタット劇場は宮廷劇場のひとつであり、ヨーゼフ

シュタット区にある。単独公演ではなかったが、前半に歌付きの劇があり、後半に帝国日本人一座が上演する形となった。ちなみに、前半はスティックス C. F. Stixによる歌を伴う笑劇〈木とブリキ Holz und Blech〉であり、この作品は初演ではない。ノイエ・ヴェルトから宮廷の劇場へのジャンプアップは、新聞の掲載がウィーンの一部の新聞から、ほぼ全新聞、つまりは政治問題を扱うヴィーナー・ツァイトゥング *Wiener Zeitung* 紙やノイエ・フライエ・プレッセ *Neue Freie Presse* 紙にも知られるようになった。ちなみに、リズリー先生の名前はウィーン再演の時には完全に消えていた。

値段についてみるならば、ヨーゼフシュタット劇場には11カテゴリーの料金が示されている²⁹⁾。オーケストラ・ロージェ10フロリン、1階ロージェ8フロリン、1階1列のロージェ1席3フロリン、1階2列のロージェ1席2フロリン、平土間1席1フロリン50クロイツァー、平土間セルクル1席1フロリン、1階バルコン1席2フロリン、第1ギャラリー1席1フロリン20クロイツァー、第2ギャラリー1席80クロイツァー、そして立見で平土間70クロイツァー、第2ギャラリー40クロイツァー、第3ギャラリー20クロイツァーである。ノイエ・ヴェルトと比較して、ヨーゼフシュタット劇場の方が高い。

次に、プログラムについてみていこう。それまでの新聞記事や新聞広告はプログラムの中身を知ることができなかったが、劇場のことだけを扱うツヴィッシェン・アクト紙は、ヨーゼフシュタット劇場のプログラムを毎日掲載している。紙面上では毎日異なるプログラムと言っているが、実は大枠は決まっています、3つのプログラムを用意したようである。

8月16日～17日、次に8月18日～27日、そして8月28日～9月1日である。1回目の改訂時では、全部で12演目あるうちの第3演目にシヨオケー Schookeeの「桶の曲 Kübelspiel」を入れ、第4演目と第5演目に従来のおまみ *Medame Komong*の「独楽の舞 Kreiselanz」³⁰⁾と松五郎 *Matzunguro*の「綱渡り軽業 *Seiltanz*」を続けている。そして、第1部の締めには濱碇傳吉 *Hamaikiri Denisha*と若いシントロー *junge(r) Shintaro*の「肩芸の竹 *Das Bambus auf der Schulter*」を昇格させている。第2部には変更はない。失われた演目は、最初のプログラムで第1部の締めになされたオール・ライトの「バターの頂 *Der Buttertopf*」である。この時点での問題は、シヨオケー、若いシントロー、オール・ライトの素性である。これは、今回の研究では明らかにすることができなかった。

最後に、第2改訂、つまり最後の形をみてみる。そこで、8月28日～9月1日のプログラムを表3にあげる。ここでは、第4演目と第11演目に新たに演目を追加している。前者は濱碇による「大桶 *Die grosse Tonne*」、後者は濱碇とシヨオケーによる「崩れ梯子 *Die gebrochene Leiter*」である。ともに、濱碇とあるのは「濱碇定吉」のことであろう。あとはまったく変動がない。全演目が12演目から14演目に増えただけである。そして、9月1日に「最終的に決定された、小さなリトル・オール・ライトの最後の慈善公演 *Unwirderrufflich letzte und Venefize = Vorstellung des kleinen Little All Right*」で幕を閉じる。この広告で面白いことには、リトル・オール・ライトの前にわざわざ「小さい *kleinen*」を付けているところである。

この17日間のプログラム変更をみると、最

表3：1870年8月28日～9月1日のヨーゼフシュタット劇場におけるプログラム

第一部	
1 御目見得口上	全員
2 角兵衛獅子	米吉、シントロー（千太郎）
3 桶の曲	ショオケー
4 大桶	濱碇
5 独楽廻し	小まん
6 綱渡り軽業	松五郎
7 肩芸の竹	濱碇傳吉、若いシントロー
第二部	
8 手品	浪五郎
9 進化した角兵衛獅子	米吉、シントロー（千太郎）
10 狐早替わり	傳吉、ショオケー
11 宙を漂うように動く竹	米吉
12 崩れ梯子	濱碇、ショオケー
13 蝶の曲	浪五郎
14 梯子 梯子の重さは400ポンド以上 その驚くべき動きに注意	濱碇、リトル・オール・ライト

(Die Zwischen-Akt 紙、翻訳：若宮)

終改訂に向けて足芸・曲持の技が強化されていくのがわかる。また、リトル・オール・ライトは一座に客を呼び寄せたであろう。最後の公演における彼の熱狂は、一座が6月にウィーンに来た時からは想像もできない。リトル・オール・ライトがひじょうに難しい場面を軽々と登り、そこで「オール・ライト」と掛け声をかけながら、一瞬のうちに地上まで降りる技に見るものが引き込まれ、また同時に見る側からも「オール・ライト」と掛け声をかけたのであろう。ウィーン再演に関しては、おそらくリズリー先生の名前の威力は帝国日本人一座の活躍に影を潜めたといえるだろう。

10. 結語

帝国日本人一座が、第1期にどのような演目をしてきたかをみてみよう。リズリー先生の同伴のもと、彼らは実に多くの芸を行っていたことが、既存の研究から明らかである³¹⁾。ニューヨークのアカデミー・オブ・ミュージック Academy of Musicとロンドンのロイヤル・

ライシウム劇場 Royal Lyceum Theatreの演目³²⁾も、第2期の帝国日本人一座の芸と、まったく同じであることがわかる。帝国日本人一座がパリで演じたのを記録した人物がいる。それは、徳川昭武とともにパリ万博を訪れていた渋沢栄一である。「サダキチの肩の上に十五フィートおよそ一丈五尺長さの竹竿をたて、三十秒間でその長竿が平衡をたもつと、三キチがすぐにその上に登った。その頂上についたときには竹竿は曲がって、観客の目には、ほとんど落ちるばかりに見えたが、その下にある父親が肩を上下して平均をたもち、竹竿はふたたび平均をとりもどした。子供は得意の声を発しながら、あるいは足だけでその身を保ち、または手だけで身を保った」³³⁾。これは、「肩芸の竹」のことである。こうした芸を保ちながら、第2期も海外を転戦したといえる。

第2期において「肩芸の竹」を演じた若いシントローと、ショオケーという人物は、誰なのかもわからなかった。これに関しては、新規参入のメンバーと考えることもできよう。

さらに言えば、オール・ライトと呼ばれる人物と、リトル・オール・ライトは同じ人物か別人か、という問題もある。そして、音楽の補充をどうしたのか。今回の研究では追求できなかった点が残る。また余談になるが、帝国日本人一座がウィーンに初めて立った日本人とするのは誤りである。1867年にグレート・ドラゴン一座がウィーンに客演し、レンツ・サーカス Circus Lenz に他の一座とともに舞台に乗っている³⁴⁾。民族的な衣装がとりわけ人目をひいたと、新聞広告には書いてある。それらを含めた研究は次回ということになる。

注

- 1) 日記は、高野廣八・飯野町史談会編『廣八日記：幕末の曲芸団海外巡業記録』（飯野町史談会）1977に出版されている。
- 2) 安岡 1984, 三原 2008, Schodt 2012.
- 3) *Daily Japan Herald*, 30 March 1864.
- 4) 表1の「旅券番号」「名前」「年齢」は『海外公人名表』を引いた大鹿 1987 : 176による。「芸名」に関しては高野 2008 : 1-2を参照した。「役回り」については諸説あるが、本稿では三原 2008 : 14を参照した。
- 5) 角兵衛獅子の2人、米吉と藤吉は松井菊次郎の一派とする本もあるが、2人の名前は混同がある（宮永 1999 : 11）。
- 6) 高野 1977には、「へんくつ」「べんくつ」の表記があるが、ここでは「ベンクツ」を採用した。
- 7) 出航（10月29日）までの細々したハプニングは、大鹿 1987 : 166を参照。
- 8) 大鹿 1987 : 166, 176、さらに三好 1993 : 56-61を参照。
- 9) 大鹿 1987 : 166, 177を参照。鳥潟小三吉らは、当初独自の公演をしていたが、1867年のパリ万博には松井源水一座に加わっていた（三好 1993 : 55-56）。鳥潟がオーストリア人妻とともにウィーン万博に登場したのは1873年のことになる（三好 1993 : 105）。
- 10) 徳川慶喜の弟。14歳の徳川昭武を行使に、20数名の随員は御印章を持参しない。その他、『慶応二丙寅年中海外公人名表』、つまりは御印章が与えられた人には第37~50号に目付や江戸町人、芸者がいる。大鹿 1987 : 171-172, 177を参照。
- 11) 松井源水一座は“Troupe Japonaise du Taicoun”, または“Tycoon’s Japanese Troupe”と呼ばれていた（Schodt 2012 : 181）。また、源水一座は単独公演ではなかった（三好 1993 : 56-60）。
- 12) 大鹿 1987 : 168を参照。
- 13) 高野 1977 : 7.
- 14) Schodt 2012 : 252を参照。
- 15) “Public Amusements”, *Liverpool Mercury*, 19 June 1869; “The Imperial Japanese Troupe in Liverpool”, *Liverpool Mercury*, 24 June 1869. これらの引用はSchodt 2012 : 252にある。
- 16) “Public Amusements”, *Lloyd’s Weekly London Newspaper*, 15 August 1869を参照。この引用はSchodt 2012 : 253-254にある。
- 17) Schodt 2012に、この引き札のカラー写真が掲載。
- 18) “Professor Risley’s Great Dramatic and Musical Combination”, *Era*, 6 March 1870. この引用はSchodt 2012 : 260.
- 19) *Fremden-Blatt*, 5 Juni 1870 : 8.
- 20) *Der Zwischen-Akt*紙の7 Juni 1870 : 3, 10 Juni 1870 : 3, 11 Juni 1870 : 2, 12 Juni 1870 : 2.
- 21) *Fremden-Blatt*, 12 Juni 1870 : 11. この広告は一面広告である。
- 22) ハノーファー王の楽団はウィーン男声合唱協会 Wiener Männergesang-Vereinが〈美しく青きドナウ An der schönen, blauen Donau〉op.314を初演した時（1867年2月）に伴奏を行った楽隊である。
- 23) 三好 1993 : 38-41を参照。
- 24) 三好 1993 : 39を参照。
- 25) *Fremden-Blatt*, 31 Juli 1870. 作品番号は筆者が補った。
- 26) フランス語のオリジナル名でOpéra-bouffe (La princess de Trébizonde)。
- 27) *Fremden-Blatt*, 7 Juli 1870 ; *Neue Fremden-Blatt*, 7 Juli 1870.

- 28) この曲は〈Japanesen-Marsch〉としてウィーン
のハスリンガー社より出版。
- 29) *Die Zwischen-Akt*, 1 September 1870 : 2.
- 30) 表3は筆者がドイツ語から翻訳したものである。
漢字のわかるものは漢字に改め、出し物のあらま
しがわかるものは第1期にまつわる資料を参照し
た。その際に参照した資料は、三好 1993 : 22-23,
宮永 1999 : 12-13, 三原 2008 : 17-20。
- 31) 宮永 1999 : 12-14, 三好 1993 : 22-27.
- 32) 三原 2008 : 16-17.
- 33) 渋谷 1963:353. この中で息子のことは「三キチ」
と呼んでいるが、当時この役は梅吉、すなわちリ
トル・オール・ライトが務めていた。
- 34) *Neue Fremden-Blatt*, 30 Oktober 1867 : 20.

参考新聞

Wien: Österreichische Nationalbibliothekに所蔵され
る各新聞

*Fremden-Blatt, Neue Fremden-Blatt, Die
Zwischen-Akt, Neue Freie Press, Wiener
Zeitung, Morgen Post, Der Floh, Kikeriki*

参考文献

- 倉田, 喜弘 (編) 幕末明治見世物事典. 東京: 吉川弘
文館. 2012.
- 日本ヨハン・シュトラウス協会. ヨハン・シュトラ
ウス2世作品目録. 東京: 日本ヨハン・シュト
ラウス協会. 2006.
- ヨーゼフ・シュトラウス作品目録. 東京: 日本ヨ
ハン・シュトラウス協会. 出版準備中.
- 三原, 文. 日本人登場. 東京: 松柏社. 2008.
- 宮永, 孝. 海を渡った幕末の曲芸団. 中公新書1463.
東京: 中央公論新社. 1999.
- 宮岡, 謙二. 異国遍路旅芸人始末書. 東京: 中央公論
社. 1978.
- 三好, 一. ニッポン・サーカス物語. 東京: 白水社.
1993.
- 大鹿, 武. 幕末・明治のホテルと旅券. 東京: 築地書館.
1987.

- 渋谷, 栄一. 航西日記. 世界ノンフィクション全集14.
東京: 筑摩書房. 1963.
- 高野, 廣八: 飯野町史談会 (編) 廣八日記: 幕末の
曲芸団海外巡業記録. 福島: 飯野町史談会.
1977.
- 安岡, 章太郎. 大世紀末サーカス. 東京: 朝日新聞社.
1984.
- 若宮, 由美. 「ヨーゼフ・シュトラウスの〈ロミオと
ジュリエット〉—グノーのオペラに基づくポプ
リ」『埼玉学園大学人間学部紀要』第14号,
pp.75-87. 2014.
- Bauer, Anton. *Der Theater in der Josefstadt zu
Wien*. Wien: Manutiuspress. 1957.
- Mailer, Franz. *Johann Strauss(Sohn). Leben und
Werke in Briefen und Dokumenten*. Bd.2.
Tutzing: Hans Schneider. 1986.
- Schodt, Frederik L. *Professor Risley and Imperial
Japanese Troupe*. Berkley CA: Stone Bridge
Press. 2012.
- Weinmann, Alexander. *Verzeichnis Sämtlicher
Werke von Johann Strauss Vater und Sohn*.
Wien: Ludwig Krenn. [1956].
- *Verzeichnis Sämtlicher Werke von Josef und
Eduard Strauss*. Wien: Ludwig Krenn. 1967.